

太平洋戦争体験記（戦後七十五年）

昭和十六年十二月八日未明、日本はアメリカの真珠湾を奇襲しました。これに依り、日米は戦闘状態に入り、と言うラジオ放送がありました。

日米戦争が始まりました。

その日、日本の上空には、幾機もの飛行機が飛び廻り、ものものしい雰囲気の中、何とも言えぬ緊張感におそわれた事を覚えています。

そして、日本は戦勝戦勝と、バンザイバンザイに沸いていました。しかし、それは長くは続きませんでした。

間もなく至るところに防空壕が掘られ、男は赤紙一つで召集され、男という男は一人も居なくなりました。女もまた挺身隊として徴用され、妹は十六歳で久留米のゴム会社に送られました。そこは、軍靴を作るところだったと思います。

食料品店も衣類店もなくなり、警察の駐在所も閉鎖となり、本当に暗い世の中となりました。

その頃、大村には二十一航空廠といって、飛行機を造るところがありました。そして、神戸製鋼所という大きな会社から飛行機の部品を空廠ウツクに納められていました。その中間で検査をする会社に私は事務員として勤めていました。会社は空廠外でしたが、大村は空襲が度々で、その度に防空壕に走りこみました。そして仕事を終え、駅に行ったその時、二台のトラックが走りました。それには空廠が爆撃され死亡した人の死体が積まれてあったと聞き、震えて鳥肌が立ちました。そして汽車も機銃掃射されたりして、運よく帰れば夜は「灯火管制」と言って灯りが外に漏れないように一つの電灯を風呂敷で包み、それだけの光で何もできない夜な夜なでした。食料も乏しくなり、また衣類に困りました。親の着物をほ解いて「モンペ」を作り、防空頭巾を抱え通勤しました。田舎でも空襲警報が度々で防空壕に走り込みました。本当に辛い日々の明け暮れでした。そして、ラジオの報道は〇〇島玉砕、〇〇島玉砕、サイパン島も玉砕と、悲しい事ばかりでした。只命令のまま、遠い島に送られ、死んでいった人達の事を思へば只々涙がこみ上げるばかりでした。丁度その頃、小長井の沖にアメリカの「B二九」が墜落しました。忽ち話は町内外に広がり、私も4キロ余りの道を走って見に行きましたが、人垣が見えませんでした。搭乗員は十一名だったそうですが、その中の二体が長里の実家の前に流され

てきました。当時は今の旧道まで海でしたので、その巨体を舟に引き揚げられたのをかすかに覚えていきます。戸板にのせられ、長里の墓地に運ばれました。九人の遺体を引き揚げ始末された小川原浦の人は、それはそれは大変だったそうです。昭和十九年十一月の事でした。

そんな中にも戦況は悪化するばかりで、二十年三月には東京が大空襲に見舞われ焼け野が原という二ユースが流れました。死亡した人は十万人とも言われています。

そして四月にはアメリカ兵は沖縄に上陸、大激戦の末、占領され、二十万人の人が命を落としたりといわれます。六月には近くの大村も佐世保も空爆され、間もなく本土に上陸する、覚悟しなければならぬと、毎日毎日怯えています。そして、二十年八月六日、広島に原爆が投下されました。大変な事らしいと、何もわからないまま、続けて八月九日、雲ひとつない晴天の朝、有明海の上を低くゆっくりと飛んでいく「B二九」を見ました。音を聞き慣れていましたので、又「B」が飛んでいると思う間もなく、鋭い閃光が走りました。この晴天に何だろうと怯えながら、布団を被ったりしていました。外に出て驚きました。西の空にもくもくと大きな黒煙が上がっていました。これが長崎を無にした原爆でした。

一瞬にして広島も長崎も生き地獄となり、何万人の人が亡くなられたとの事でした。

東京も焼け野が原となり、広島も長崎も亡くなり日本はどうなるのだろうかとうと悲しい日々明け暮れでした。

そして、八月十五日の朝、今日は大事な放送があるから「そこ、ここ集まって聞くように」との町内放送がありました。何だろうと誰も居ない駐在所の庭に集まりました。それは畏くも敵かな天皇陛下の玉音放送でした。敗戦と、国民に対し「耐え難きを耐え、忍び難きを忍んでくれ」との内容のお言葉でした。皆、地にひれ伏して号泣、陛下のおつらい御心を拝察し、これまで辛く悲しかった事の数々が脳裏をよぎり、溢れる涙が止まりませんでした。最後まで言葉を拝聴し、ようやく頭を上げた時、あゝ戦争が終わったのか、戦争が終わった、戦争が終わったのだと、胸を撫で下ろしました。

昭和二十年八月十五日、戦争は終わりました。

それから数日後、私は長崎に行きました。

それは美家のすぐ隣に、長崎から一家六人疎開されていて、その長女の人被爆され長崎まで治療に行かれますので、友達になっていたし一人ではと、着いて行きました。長崎に着いた途

端、びっくりしました。驚きました。長崎一面焼け野が原で煙がまだあちこちに燻っていました。たった一発の原子爆弾で何万人の人が亡くなり、こんな状態にするその凄さ、恐ろしさ、あの日の黒煙と長崎のあの時の光景は、私の頭の奥深くに刻まれ忘れることはできません。

一方、食糧難がひどく、一言、二言で言えることではありませんでしたが、人々は安らかに過ごす事の喜びに何年ぶりかの笑顔もありました。

七十年は草木も生えぬとの説もありましたが、一ヶ月後には三十種の草が芽生えたそうです。

東京も広島も長崎も、復興は早く、日本は素晴らしい国になりました。日本人本来の英知と努力により、尚、歴代のお偉い方々のご尽力に依り、今日の日本があると思います。七十五年を振り返る時、この平和、この豊かさに包まれながら、私は長い間、恙なく生かしてもらった幸せに感謝の念でいっぱいです。でも私は忘れることはできません。この戦争で亡くなった人は三百十万人とも言われています。

そして戦争に反対された山本五十六大将、他犠牲になられました。

また、国の為、国の為と若い生命を自爆して散った人々、
そして未来ある大学生が角帽がぶり、鉄砲担いで行進する姿新聞紙上に私は泣きました。

この様な戦争が二度と無いことを切望いたしますと共に、世界の平和を心から祈念致しまして結びと致します。

令和二年十月

諫早市小長井町

梅林ミツヨ 九十七歳

追伸

昭和十九年十一月二十二日、中国から飛んできた「B二九」は佐賀県出身の坂本少佐が大村から飛び立ち「B二九」に体当たりされ、「B二九」は小長井港沖に落ちました。搭乗員の引き上げから遺体の始末をされた人々は、それはそれは大変だったようですが、十一人の遺骨は丁寧に白木の箱に収められ、大村の憲兵隊に届けられたそうです。戦後、佐世保の基地から米軍が受取りにこられたそうですがその丁寧さに大変感激され、感謝されたとあります。

激しく戦った中でも戦が終われば敵も味方もない、人間同志、小長井には十一人を慰めるため、海の見える高台に鎮魂碑が建立されています。更に平成二十七年十一月二十一日に「戦後七十年日米友好追悼式」が開催されました。「B二九」搭乗員鎮魂碑の前の広場でしめやかに執り行われました。

戦後七十年日米友好追悼式

開式のことば、黙祷（自衛隊によるラッパ吹奏、犬尾委員長による式辞、長崎県知事、諫早市長、米第五空軍司令官、海上自衛隊大町将補による追悼のことば、献酒、献花、一般参加者による献花が続いた。

その後、高来町榎堂坂本少佐の慰霊碑の前でも同様の式が執り行われたとしてあります。

（この記事は、平成二十八年度「文協こながい」に記載されたものです

七十五年前、激しく戦ったアメリカは、今、唯一の友好国です。日米同盟が永遠に続きます事を切に願い終わりと致します。

かしこ